

高橋秀哉・小川政弘作 「劣等感」

ナレーション 「劣等感」。自分がほかの人より劣っていることを自覚し、惨めに思う気持ち——。

鈴木啓介 おい山田、この前の試験の結果が発表になってるよ。一緒に見に行こうぜ。

山田一郎 こいつ、相変わらずだな。この自信家め。

鈴木 まあそう言うなよ。な、見に行こ。

ナレーション ここは青春高校の一室。先日行われた試験の結果が発表になったので、自信たっぷりの鈴木君は、あまり乗り気じゃない鈴木君を誘って、発表へと急ぐのでした。ところが——。

山田 おい、鈴木、どうしたんだよ？

鈴木 えー、お前の名前があるぞ。

山田 なんだって？ 本当かよ。それで鈴木、鈴木…と。あれ、今回お前の名前がないじゃないか。書き忘れたのかなあ。

鈴木 シラジらしいこと言うなよ。1 回ぐらい名前があったからってのぼせるな。(小走りに去る)

山田 おい、鈴木、ちょっと待てよ。おいったら！

ナレーション 鈴木君と山田君。彼らは全く違う性格の持ち主で、いつも人の上に立ちたい鈴木君に対して、他人がどうであろうと全然気にも留めない山田君。こんな対照的な二人が、入学式の時、ちょっとしたことで知り合い、今まで約 1 年半の付き合いになるのでした。

次の日、ホームルームの時間——。

音楽 (ブリッジ)

山田 やあ鈴木、どうしたんだ？ 元気ないじゃないか。

鈴木 何言ってんだ。いつもと変わらんよ。

山田 お前、まだ試験の発表のこと…。

鈴木 (さえぎって) 違う。別に昨日のことなんか気にしてないさ。

山田 そうか。ようやくいつもの自信たっぷりの君に戻ったようだな。そう言えば今日は文化祭の役員を決めるとか森田が言ってたから、どうだ鈴木、やってみろよ。

鈴木 そうだな。やってみるか。どうせ立候補するやつなんていないんだからな。ほら来たぞ。

ホームルーム委員 起立、礼、着席。

先生 今日のホームルームの時間は、文化祭の役員を決めるとかで、この時間は森田に任せることにする。

森田 はい、先生。それでは現在、少し文化祭の役員が不足していますので、このクラスから 1 名で結構ですからお願いします。

山田 おい、鈴木。

鈴木 分かってるよ。任せとけて。

ナレーション 鈴木君が手を上げようとした時——。

森田 ねえ、山田君。あなたやってみない？ わたし、すごく適任だと思うんだけどなあ。

全員 (口々に)「そうだ！」「山田、やってくれよ」など。

山田 おい、みんなちょっと待てよ。おれなんかより、ほかに立候補者がいるかもしれないじゃないか。

森田 具体的にだれか言ってください。

山田 例えば鈴木とか。

全員 「エー、なんだって？」「鈴木かよ」「お呼びじゃないよ」

森田 鈴木君。山田君があのように言ってるけど、どうなの？

鈴木 別に役員なんかやりたくないよ。山田が適任だと思うならそれでいいじゃないか。

森田 それでは絶対多数で山田君に決定いたします。

効果音 (鈴木、席から立って教室を出ていく。)

山田 おい、鈴木、おい！ おい！

ナレーション その気になっていた鈴木君には、大きなショックでした。彼は逃げるように教室を出ました。山田君はもう彼に声をかけてあげることもできなくなってしまいました。彼のためにとやったことも、かえって逆に彼を傷つけることになってしまったからです。

鈴木(モノローグ)(エコー) 山田のやつ、あいつがおれのためにとやってくれたことは十分分かってるつもりだ。だけど、クラスの前で恥をかかせやがって。なぜだ？ なぜみんな、このおれじゃダメなんだ？ 今までみんなより一歩リードしてきたつもりでいたのに…。

ナレーション 文化祭も間近に迫ったある日――。

山田 森田、鈴木見なかったか？

森田 いいえ。このごろ彼、授業終わったらすぐ消えちゃうみたいよ。

山田 そうか。やっぱり…。

森田 どうかしたの、鈴木君が？

山田 いや、別に。

森田 それより、山田君。あなた、思ったよりやり手ね。わたし、びっくりしちゃった。

山田 いや、今まで全然クラスの代表で選ばれたことなんてなかったから。

森田 だけど先輩も、「よくやってくれる」って大喜びよ。

ナレーション 二人の会話を、忘れ物を取りに帰ってきた鈴木君が聞いているのを、二人は夢にも知りませんでした。

鈴木(モノローグ)(エコー) やはり、あいつのほうが、クラスでおれなんかより必要な人間なんだろうか？ あいつが役員に加わってから、役員の間での評判もいいし、準備も進んでいるようだ。おれが役員をやっていたころとは大違いだ。なってこった、おれが山田に負けるなんて…。なんてこった！

ナレーション 今まで自信家だっただけに、鈴木君の心の中にある劣等感は、人一倍大きくなっていくのでした。そして、次の日の放課後――。

山田 よお鈴木。待ったんだぜ。

鈴木 なんだお前、今日 役員会ないのか？

山田 いや、たまにはお前と一緒に帰ろうと思ってな。

鈴木 チェ、勝手にしろ。おれは別に話すことなんかないぜ。

山田 まあそう言うなよ。お前、まだ気にしてるみたいだな。あれからおれと口をきこうともしないじゃないか。

鈴木 今度は説教かよ。どうせおれはお前のようにクラスで必要な人間とは違って、存在感ゼロの人間だ。今じゃ成績だってお前の次だ。

山田 何言ってんだよ。そんなこと関係ないじゃないか。おれは今まで、お前と付き合ってきて、一度だってそんなこと思ったことないぞ。

鈴木 お前は思ったことなくても、おれはあるんだ。おれは今までなんでも自分の思い通りにしてきたんだ。だからたとえ友人でも他人に先を越されるのがイヤなんだ。

山田 そうか。おれは今まで、お前とおれはまるで反対の性質だと思ってたけど、こうしてみるとおんなじだな。お前の自信過剰は、裏返せばたちまち劣等感だもんな。

鈴木 劣等感？（間）うん、そうかもしれないな。

山田 今まで自分は絶対大丈夫だと思っていただけに、一度その自信が崩れると、ものすごくショックで、勉強をやっても頭に入らなくなる。そのうち、何をやって“おれはダメなんだ”と思うようになって、しまいにはやたらと惨めで、生きているのさえイヤになる。

鈴木 お、おい山田。どうしてお前、そんなにおれの気持ちが分かるんだ？ そのとおり、凶星だよ。お前さっき、「おれたちは同じだ」と言ったけど、するとお前も…？

山田 そうさ。僕も中学の時、勉強ができなくて、クラスの連中にひどく劣等感を感じたものだったよ。まあ僕は君のような自信家じゃなかったから、それほど大きなものとは言えなかったけど、生まれつきあまり出来の良くないのが、中学も2年、3年となって受験も迫ってくると、親や先生からもハツパをかけられる。ますます焦って、しまいにはノイローゼみたいになったんだ。

鈴木 お前が、ノイローゼに?!

山田 うん。このままじゃ死ぬしかないと思ったら、ふと、小さいころ行っていた教会思い出したんだよ。

鈴木 教会って、あのキリスト教のか？

山田 うん。思い切ってそこへ行って、牧師さんに全部話してみたんだ。それまで、自分なりに、劣等感に関する本を読んだり、先輩に聞いたりしてたんだけど、その牧師さんからは、意外なこと言われたよ。

音楽 (ブリッジ 回想)

牧師 ——そう。大変だったね。人の心っていうのは本当に複雑なものだから、一度心の問題で悩み出すと、まるで泥沼みたいに深みにはまってしまいうんだね。山田君、劣等感も、優越感も、その根にあるのは、“自分を中心にして他人と比べる”ということじゃないかな？

山田 自分を中心にして、ですか？

牧師 そう。自分が中心。自分が少しでも他人より上なら、気持ちがいいし、下になると途端に不安になる。自分を超えた他人が憎くなる。これが、わたしたち人間の持って生まれた性質なんだ。ところがね、そうやってなんでも自分を中心にするのは、本当の自分を持ってないからなんだよ。

山田 本当の、自分ですか？

牧師 うん、本当の自分。それがないから、絶えずだれかと比べて自分を”高く”しておかないと安心できないんだよ。“自分はだれだ？”“どこから来たんだ？”“なんのために生きているんだ？”——言わば、生きてるってことの根本的なことが分からないから、ものすごく人間は孤独で、不安で、頼りないわけ。

山田 (驚いて)先生、そうです。僕のことです、それ。——でも、でもどうしたらいいんですか？

牧師 山田君。もしだれかが今の君をそのまままで、ありのまんまで受け入れてくれたら、どうする？「いいんだよ。君は君のまんまでいいんだよ。わたしには、君のことはみんな分かっています。人のことは気にしなくていいんだよ。さあ、おいで。」って言われたら——？

山田 (涙声になって)先生、もしそんな人がいたら、僕、僕…。だれですか？ だれなんですか？
牧師 イエス・キリストさ。ほら、見てごらん。(聖書を開いて、読む)
聖書の言葉 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたが
たを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくび
きを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびき
は負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」(マタイの福音書 11:28-30)
音楽 (ブリッジ 回想終わり)
鈴木 ふーん。それでか、お前がそうしてられるのは。「あなた方を休ませてあげよう」か。おれ
…でも大丈夫かな？
山田 もちろんだよ。こんな僕でも変えられたんだ。鈴木、今度の日曜、教会行ってみようよ！

<完>